

ジョン、デューイの宗教観

西原, 猛

<https://doi.org/10.15017/2328828>

出版情報 : 哲學年報. 14, pp. 289-304, 1953-02-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



ジョン、デューリーの宗教観

西 原 猛

第一次世界大戦以來今日に至るアメリカ宗教思想界の展開には二つの潮流がある。

(一)は Karl Barth の流れを引く所謂辯證法神學思想の近年の展開であり、Reinhold Nieber や Paul Tillich 等がこの New-Orthodoxy の代表とされている。(二)は自由主義の旗幟を掲げて進んで來た自由宗教思想の流れである。これは近代的な批判精神や科學思想の上に立脚する。而してかゝる進歩的な自由宗教の思想の流れはユニテリアン派やユニバーサリスト派の中にもあり、又一般思想家や學者の中にも少なからず見出すことが出来る。その中でも特に人間的な立場を主張して、進歩的態度を採る人々を Humanists と呼び、John Hanes Holms や Charles Francis Potter 等はその代表的人物である。デューリーはその流れと思想傾向を同じくし、しかも最も顯著な存在である。彼の宗教観は、ヒューマニズム精神の上に立つ。而して人格的な神の實在を認めず、超自然の觀念を排除し、人間經驗と社會生活とのみを地盤としてその宗教観を樹立している。かゝる宗教観を理解するためには、彼の宗教思想的立場を最も鮮明に發表した唯一のものといはれる A Common Faith, New Haven; Yale university Press (1934) によらなければならぬ。この小論の意圖する所は彼の宗教観の考察とその批判である。

(一)

デューイは本書の冒頭に於いて、「傳統的に宗教は、超自然と云う觀念と密接に結びついたものと見做されて來た。超自然と云う觀念を離れては、宗教的とよぶに値するものは存在し得ないと考えている人が今日も極めて多い。勿論その内容は廣い幅を持つて一樣ではない。傳統的なキリスト教者の多くは、自然の力を遙かに越えた超自然者と靈魂の不滅とを必要にして缺くべからざるものとする點に於いて一致する。」

一方これに反對する陣營の人々は、「文化と科學との進歩の結果、超自然的なものは最早完全に信用をなくしてしまつた。それと同時にかような超自然的な信仰と結びついた凡ての成立宗教も無用のものとなつてしまつた。併しそれのみではない。この陣營の中でも極端な論者達は、更に問題を突きつめて、超自然觀の排除によつて無用になつたのは、歴史的な諸成立宗教だけではなく、それとともに宗教的性質なものすべてが、捨て去られなければならないと考へるのである。」即ち、この陣營の考へ方によれば宗教と超自然とは不可分離的なもの故後者の運命は即ち前者の運命でなければならぬ。従つて、超自然觀の適用しなくなつた現代に於いては、宗教は既にその存在理由と意義を持たなくなつたと主張するのである。この主張を認めるか否かという點で此等二つの陣營は烈しく相對立している。併しかく相對立しながらもこの兩者は宗教と超自然の不分離、宗教的と云ふことと超自然的と云ふことの同一視と云う一點に於いては一致しているのである。

デューイは宗教と超自然とを不可分離のものとは見ない。彼はこの兩者の同一視の根據、結果、理由及び價值について論じ、その議論の中に、超自然を離れて、それとは獨立して存在するものとして、宗教を考へている。彼の言葉によれば、

「私は人間經驗に於ける宗教的營みの性質について、全く別個の考へ方を展開しようとする。その考へ方とは、超

自然的なものから、又超自然的な考え方の周邊に成長している様々なものから、宗教的なものを區別し、分離するものである。これ等の派生的なものは、實はわずらわしい挾推物に外ならない。そのことを論證しようと試みるであらう。純粹に宗教的なものは、これ等の挾推物から解き放された時に、一つの解放的展開を遂げるであらう。そうすることによつて、はじめて、人間經驗に於ける宗教的な営みは自由に、それ自身の本來の性質に従つて、發展し得るであらう。」

かく彼の立場は上記の二陣營、即ち、傳統的宗教者の陣營と宗教を遺物視する陣營の何れとも對立する。しかし、かく對立するのは一に超自然を認めずこれと無關係な自然的、人間的宗教の存在理由と意義を主張する點でなければならぬ。デューイの宗教觀には奇蹟が入つて來る餘地がないのみならず啓示もその位置を見失うことになる。何となれば、人間經驗や人間活動も自然現象の一部である。自然の法則性という點ではその例外とはならぬ。今日、啓示が認容されているのは心理學的研究が未發達だからである。もし將來個人の内面的な心理作用も、すべて法則性によつて律しられていることが明瞭になつて來た場合にはどうなるか。神の自然法則破壊的な自由意志による啓示というようなものは認める餘地がなくなつて來るといふ。かゝるデューイの主張はその根柢に彼獨特の神觀の横たわつてゐることを明白に示しているといはなければならぬ。

デューイは人格的な神の實體としての存在を認めない。又少なくとも從來行われて來たような方法による神の存在の證明（例えば本體論的證明、宇宙論的證明、目的論的證明等）は次第に近代人の心を滿し得なくなつて來てゐるという點で容認しないのである。更に近代的神學が據り處としたような直接的な宗教經驗による神の存在の證明さへも神の存在の證明とならない點を指摘している。彼は『神存在の經驗的證明の錯覺』の節で、かゝる宗教經驗の具體的

な實例を引用して、次のように批判している。即ち、ある人がこう記している。

「私は過勞の爲に倒れて、まさに神經症になりかけていた。ある朝、長い眠られぬ夜のあけた後に、私は決心した。自分をいたわろうと絶え間なく働いている氣持を捨て、その代りに、神に近ずこうときめた。毎日、一定の靜かな時間を持つことに決意した。その時間が來ると、私は、私の生命を、その究竟の本源に結びつけた。又私は神の中にあつて、生き、行動し、私の全存在を持ち得ているのだということに、思いをいたした。それは既に、三十年以前のことである。それ以來というもの、私は文字通りに、一時間すらも、暗黒、絶望等の氣持を味つたことはな⁵⁰」これは誠に感銘深い記録である。私はこの記述の眞實性を信ずる。記されている經驗の内容に對しても、何の疑いを挾むものではない。それは確かに、人間經驗の中に於ける宗教的な面を描き出している。

「しかし、それは又、それと同時に、特定の宗教によつて押付けられた重荷を負うた經驗の様相を描き出している。この筆者は明らかにキリスト教という宗教の下に生い立つて來た。その結果、その宗教に特有な人格神的な考え方に基づいて、自分の經驗を解釋しているのである。これと實質的には同じような經驗は道教を信する者によつても、佛教徒によつても、マホメット教徒によつても、持たれているに違いない。あらゆる超自然的な力や、その干渉を認めないものを含む無宗教者にもかような經驗はある。」

「その解釋は、それを與える當事者の中に染み込んでゐる文化から、派生して來たのである。たとえば、宿命論者は、それに對して、ある一つの名稱を與えるであらう。クリスチャン・サイエンスの信者はそれとは違つた他の名稱を與えるであらう。超自然的なものを一切認めない人は、更に他の名でこれと呼ぶであらう。この經驗を如何に解釋するかに對する決定的要素は、その當事者が、それまで導かれて來た教義の特定の裝置が如何なるものにあつたかに

ある。」

このような特殊の経験がなされたという事は人間の経験として心理的事實である。しかしそれを神に對する経験であると説明すれば、そこに經驗そのもの以上に、當事者の解釋が加わる。しかもその解釋は、當事者の生い立つて來た文化の型や、特定の成立宗教の教理などから導かれて來たものに外ならないとする

デューイは實體としての神の存在を認めない。が彼は戰鬪的で、反抗的で人間を孤立させる傾向を持つ所謂無神論者 (atheist) と混同されることを避けるために、神という言葉を残しておくのだといつてゐる。併し、彼の神は極めて特異な内容を持つ神觀念である。彼によれば神 (God) という言葉は一方に於いては、ある特定の實在者を意味するためにのみ用いられてゐる。他方に於いては、それは我々に希望を與え、行動を促す様な、凡ゆる理想目的の綜合統一體を意味するために用いられてゐる。綜合統一がかような我々の態度や行爲に對して、ある力を持つのはどうしてであるか。それが我々とは別個の、既に實現されたものとして存在するからであるからか。或は、それ自身が内に備えてゐる意義や價值によるのであらうか。神という言葉は、ある與えられた時と處とに於いて、人が自分の意志や情緒の上に何等かの權威を持つと認める様な理想目的を意味するものである。即ち思惟と想像の作用 (—これは未だ實現されない事柄が、我々の心の中に宿り、我々を驅り立てる力を持つものである。) によつて齎された綜合統一をそれが具備してゐる限り、人間が凡てを擧げて捧げる價值である。従つてデューイにとつての神は、實體的な存在でなくて、理想としての存在である。人生及び社會に對する全體的な Perspective の上に立ち、人間の社會生活から造り出された理想像であり、人間行動の目標となるものである。それを神と呼んでもいいと彼は考へる。

(一)

人格神の實體的な存在を信ぜず、超自然を容認せず、しかも奇蹟や啓示を否定するデューイはそも／＼宗教を如何なるものと見ようとするのか。彼は根本的には宗教を否定しようとするのではない。併し成立宗教のみが、宗教であるとは考えない。かゝる見地を明らかにするために、彼は個々の宗教(a religion)と宗教的、なもの(the religious)とを俊別する。

(1) 宗教とは、「宗教一般というようなものは存在しない。宗教は常に特定の信仰と實踐とを持つた團體を意味する。又その團結に強弱の差はあれ何等かの制度化された、組織を持つてゐるものを指す。」

「宗教とは嚴密な意味では集合的な語である。それが集合的であるというのは、論理學の教科書で説明されるような意味ではない。組織され、編成された統一ではない。全くの雜多なる寄せ集めである。宗教に普遍性のあることを立證しようとしても、その試みは廣過ぎるか、狹過ぎるか、何れかの行き過ぎに終るであらう。」「宗教とは具體的な内容を盛つた名詞によつて示されるものである。」

(2) 宗教的、なものとは、「形容詞によつて現わされる人間經驗の内容である」「宗教的、という形容詞は、特定の實體的なものは何も指し示さない。如何なる制度や、習慣をも又信仰の組織的體系をも意味しない。歴史的な宗教や、實際にある教會を、あれこれと指す様な意味のものは何も含まない。何となれば、この言葉は、それ自體として存在することが出来る様なものは何も指していないからである。又それを組織立てれば、特定の獨特な形の存在になる様なものを含んでいないからである。それは人間の態度を指している。如何なる對象に對しても、如何なる目的や

理想に向つても構え得る様な人間の態度を指すものである。」

しかし、彼はこの兩者の相違を遂別することによつて一個の宗教を打ち立てようと思圖していない。こゝに宗教的なものと呼ぶに相應しいようなものゝ、内容や見透しを解放して見たいと考えている。これは彼の宗教論のうちで最も根本的な又最も興味のある點である。我々が一つの宗教 (a religion) を持つとすると、その途端に、人間經驗にあつて宗教的なものと稱さるべき理想的要素或は religious elements of experience には他の要素が附加されるからである。即ちそれに、それ自身のものではない別な重荷を課せられるのである。理想的要素自身とは直接には何等關係のない、それぞれの時代の信仰や、制度習慣的な行事の重荷を負うことになる。しかるに、「多くの人々は今日、宗教として存在しているものの知的内容や道德的内情を見て強い嫌惡と反撥とを感じる。その結果として、これ等の人々は自分自身の中にあるものを見落している。それが實を結べば純粹に宗教的になるようなもの、そう云う態度が自分の中に潜んでいることに氣付いてすらいないのである。」

即ち、成立宗教に附着した挾雜物に妨げられて「自然的な人間經驗の中に、本來備へた宗教的價値を、はつきり自覺し實現すること。」が出来ないのである。従つて彼は純粹な人間の態度としての宗教的なものは成立宗教の中ではこの挾雜物に制約され、窒息させられようとしていたので宗教の究極的な純粹化と共に成立宗教からこの宗教的なものを開放し、それ自體を表明し得る機會を與えることが何よりの急務であると考えた。

こゝに、宗教的なものとは或る特別の客體や特別の理想についてのみ見出され得るものではなく、それは如何なる客體、理想、目的に對しても取られ得る一つの態度を意味していると共に、制度として固定性を持つ宗教でなく經驗の一面として作用する宗教的なものに注目し、これを宗教の重荷の下から救い出そうと考えている。しかもこの兩者

の對立は絶對的であつて何人もよくこれを調停することは出来ぬ。

又、今までにも「宗教的經驗」を云々するものは決して尠くないが、通常それは或る特別の經驗として他から獨立のものと考えられている。しかしながら、彼にとつて宗教的なものとは、獨立の經驗であるよりも、人間經驗の性質としてはこれ等凡ての經驗の何れにも屬し得るものである。即ちこれ等の凡ゆる經驗にその一側面として屬し得る或るものである。即ち如何なる經驗に於いてもそれが或るものを含む場合に宗教的經驗になり得るといふ。然らば如何なるものを含めば宗教的經驗になり得るのか。これに答えるために彼は問題を轉じて順應 (adjustment) といふことに觸れて行く。

人間生活の基調をなすものは環境との順應 (adjustment) 關係である。この態度は適應 (adaptation) よりは更に積極的である。潑刺としていて、もつと明るく。そして適合 (acomodation) よりは能動的である。併し、それと同時に我々自身の内に起る變化がある。それも我々が生活を営んでいる外界との關係によつて起るものではあるが、もつと遙かに全面的であり、深きに根差した變化である。それは我々の周圍にある環境的條件の一つに對する、この要求の欲望と云う様なものではない。人間としての自分の全體に關わるものである。その規模の大きさの故に、かような人間自身の變容には持久性がある。それは精神的な又外面的な環境事情の消長變化を貫いて持續する。それには又、我々自身の諸要素を調節し調和させる働きがある。その結果として、我々の周圍には、個々の條件の變化が起るにも拘らず、それ等も再調整されて我々との關係に於いて處を得た形で落付くのである。この態度は服従と云う調子を帯びてゐる。併し、それは當事者自身の自らの意志に基く。従つて、それはストア派のように、運命の奔弄にも拘らず、心を亂さずにそれに耐えて行こうとするものであるが、ストア的な決意以上の何かを含んでいる。こゝに當

事者の意志に基くといつたけれども、それはその態度が、ある特定の決意や意志作用に依存しているという意味ではない。人間の有機的な綜合體としての、全體としての意志の變化であつて、意志の中に於けるある特定の變化ではない。この様な全體的持久的變化を人間の態度の中に呼び起すことが宗教の働きであるというのが成立宗教の主張である。デューイはこの論旨を反對に置き換えて、かゝる變化が起ると、そこに明確な宗教的態度が現われて來るのであり、而して、かゝる變化を齎らし得るのは、ある特定の宗教のみではない。如何なる原因に基こうとも又如何なる手續きによろうとも、かゝる變化が起つた時には、そこに宗教的な様相や機能が現われているのであるという。

即ち、彼によれば或る經驗が生命の過程に於いて又この過程に對して何事かをなすならば、それは宗教的な力を持つと言ひ得る。換言すれば、生命の過程に於いて、よりよい、より深い永續性のある順應 (adjustment) を人間生活に生ぜしめる力があれば、それは宗教的とよぶことが出来るのである。従つてかゝる意味の宗教的なものは決して稀有なものではないことになる。宗教の教理的知的裝置や制度風習的な附着物は、嚴密にはこのような經驗の本質的な特性には關係なく外から偶然に附着して成長したものである。何となれば、そうしたものは各個人に攝取されている文化的傳承に關する事柄であるからである。デューイはこゝに adjustment をとりあげ、そこに宗教的なものを考へているが、この場合には自己を全體として纏め、しかも世界との間に積極的な關係を作り出して行くということが問題になると思う。この問題に對して彼は、凡そ全體という觀念は、思惟と想像を俟つてこれを掴むことが出来るという。限られたる世界が宇宙 (自我が關係する四圍の條件の全體に對して與えられた名稱として) として把握されるためには、思惟と想像の作用によつて擴大されるより外はない。全體は人間の反省や知の及ぶところではない。全體としての自我というのは一つの理想であつて、それは思惟と想像との所産である。従つて、自我が宇宙に對して徹底し

た、深きに根差した調和を持ち得るという考えが起ることは、思惟と想像の作用を過してのみ可能である。この問題は自我の統一が如何にしてなされるかということにも重要な聯關を持つてくる。自我は自ら行つたり、他からの影響を受けたり、何事かを爲し遂げたりして絶え間ない流動の中にある。その絶え間なく流動する自我の統一は自我自身のみによつては到達されない。自我は常にそれ自身を越えた何ものかの方向に向けられている。従つて自我自身の統一ということは総合的な觀念に據る所が多い。この觀念とは移り變り行く世界の諸場面を統合して、宇宙というような思惟と想像の作用によつて全體的のものにはまで作り上げた場合のものである。即ち自我の統一は世界の統一と結びついて可能になるのである。換言すれば、世界が想像力によつて統一を與えられる時、それが宇宙と呼ぶものになり、自我の統一は、この宇宙の對應關係に於いて生れるのである。

然らばデューイの指摘する宗教的、ものとは具體的には如何なる性格のものか。一言にしていえば理想に對する信仰であるといえる。その理想とは何か。彼によれば各人にとつての全體的見透し (Perspective) の上に立つた人生の目的であり、しかも全人間的な感激を以つて追求し得るような人生の目的である。彼は、「私はこのような信仰は、総合的な理想目的 (ideal ends) に對する獻身による自我の統一であると述べた。その理想目的を與えるのは、我々の思惟と想像の作用である。その理想目的に對して、我々の意志は、我々の慾望や選擇をも制約するに値いする意義を認めるのである。」という。人間の生活行動は常に目的を持つてゐる。このような目的が全體として總合されて來ると、そこに理想が現われて來る。而してかゝる理想が、心中に描き出されて來ると、それは心理的な一つの力になり、理想の側から人間に働きかけて來る。そして人間生活の選擇や行動に影響を與える力となり、理想は人間の心中でそれ自身の權威を持つことになる。それは現象的事實に基く構成ではない。知性によつて保證された眞理による

權威でもない。又眞理を示す人の身分による權威でもない。併しながらかゝる理想目的を持つた實踐的信仰 (moral faith) の凡てが直ちに宗教的性格を持つてゐるという意味ではない。宗教的なものとは、實踐が情緒によつて着彩されたものである。併しそれは實踐的な確信の目的となる處のものが強烈な情緒を驅り立てる場合に限る。單に情緒が強いのみではなく、自我全體を統合せしめる程包括的な目的によつて、その情緒が驅り立てられ、支えられている場合のみである。自我に對しても、又包括的な自我に關わる宇宙に對しても、その兩者に對して、目的が包括的であるということが、缺くべからざることである。

デューイの意味する宗教的信仰とは彼の所謂、實踐的信仰 (moral faith) が強烈になり情緒的なものを伴つた場合のものである。彼は「我々の運命を支配する目に見えない力」とは一つの理想の力であるという。かゝる理想は人間生活の凡ゆる面に互る具體的な事實と密接な關聯を持つてゐる。その理想内容として彼が持ち來るのは所謂、よきこと (good) である。人間は本來、生活の中のよきもの (good) を更に展開させる力を持つてゐる。併し、未だ會てその力を充分に活用したことはなかつた。それは人間が、自分達以外の又自然以外のある力に頼つてゐたからに外ならない。外の力に頼ることは、人間的努力を放棄するということの裏返しに過ぎない。理想それ自身は自然的條件の中に、その根を持つてゐる。かような理想は、思惟と想像の作用が現實の存在を理想化した場合に現われて來る。それは思想と行爲に與えられた可能性に對する確固たる把握の上に立つてゐる。自然的な地盤の上に、現實に實現され得る價值やよきもの (good) がある。人間の社會生活や、藝術や知識に關聯したよきもの である。理想化する働きを持つ思惟と想像の作用は、人間經驗の危機的な轉換期に見出される處の、最も貴重なものをしつかり掴んで、そしてそれを打ち出すのである。それ等が、よきものであること (goodness) を示す爲に、我々は外面的な尺度や保

證を必要としない。それ等は我々の中に既にあるのである。それ等は、よきものとして存在するのである。そして、それ等の中から我々は我々の理想目的を形作つて行くのである。のみならず、思想や欲求や努力の對象として、人間經驗に基くよきものから我々が打ち出した目的は、確かに存在する。がしかし、それは目的としてのみ存在するのである。目的や意圖は人間行爲を決定する力として働く。目的や理想は決して、單に心中のみに存在するものではない。それは性格の中に、人格の中に、そして行爲の中に存在する。目的というものは實動的な形で存在するものである。

我々が信仰に結び附けるところの理想的目的は影のようなものでなく、又浮動的なものでもない。理想的目的は、具體的である。我々の間の關係やその關係に含まれた價值に對する我々の理解という具體的な形をとる。我々即ち現在生きてゐる我々は遠い過去にまで繋がつてゐる人間存在の一部分である。又大自然と相互に影響し合う人間存在の一部分でもある。文明の中にあるもので、最も大切なものは、我々自身のみではない。大切なものは、永續的な社會の營みや苦勞のおかげで存在しているものである。我々はその永續的な社會の一環である。我々が受け繼いだ遺産としての價值を保存し、傳へ、調へ、廣げることが、我々の責任である。そして我々より後に來るものが、それを我々が受け繼いだよりも、もつと充實し安定し、もつと廣く受け入れられ、もつと豊かに分ち合へるようになることである。こゝに宗教的信仰に必要な凡ての要素が、宗教や、階級や、民族に制限されることなく存在する。このような信仰は常に暗黙の中には、人類にとつて共通な誰でももの信仰であつた。

こゝに彼のプラグマテイズム的な思想は、はつきりその面影を映し出している。

要するに、如何なる行爲でもよい。若し或る理想を信じ、凡ゆる障礙にも拘らず又自己の損失をも顧みずその一般

的且つ永續的な價值のためにこの行爲が營まれるならば、それは宗教的であるということが出来る。従つて、宗教的であるためには、決して特定の制度的な宗教に自己を結びつける必要はない。而して人間が可能なものを信じて現實のものを越えて行く時、彼を導き且つ助けるのが理想の力である。従つて、理想の獨占と且つそのための超自然的な手段の獨占とを企てる歴史上の諸宗教に對して、デューイは寛容であることが出来ない。故に、彼は a religion と religious なものとの間に橋を架することは不可能であるという。勿論宗教的なものは成立宗教の中にある。併し成立宗教とは無關係に一般人間生活の中にもある。成立宗教から切離した純粹な人間の態度として彼は所謂宗教的なものをこのように明らかにした。即ち彼は、單に「凡ゆる人間が宗教的であり得る」と主張するのではなく「凡ゆる人間が凡ゆる行爲に於いて宗教であることが出来る」といふ一點を主張するのである。換言すれば、宗教的なものは禁欲や瞑想と共にあるのではない。反對に何か理想を信じ、障礙を突破して進むところの我々の生活態度の中に宗教的なものは生きてゐるのであり、又現代の宗教的なものはかゝる意味に解釋せらるべきものであると主張するのである。併し彼はこゝで再び眼を成立宗教に轉じて、成立宗教もその實質的な效用はやはり、理想追求にあつたことを指摘してゐる。併し、その教理は、實體的な神や超自然力を認めたが故にひずみを生じたのである。が、實質的には理想の追求をその機能としたが故に、その面で歴史的諸成立宗教はそれらの時代に、その存在の意味を持つたと考えてよいのである。併し今日、成立宗教に對する不信任という現狀はこの大切な理想追求まで捨てさせる結果を招來してゐる。近代人にこの理想追求の歡喜を興えることが最も緊要である。然しながら、かゝる意圖は決して、直ちに現存の教會を破壊することを意味しはしない。むしろそれは、その活力を恢復する方法を提供するものである。大切な涵養されなければならない様な人間的價值の貯えが、それ等の教會によつて、高揚され、強化され得るのである。そ

の價值とは、凡ゆる人間的な關心や工夫機構を滿たし、それによつて調整されるものである。それが、今までとは異なつた方法により、異なつた象徴を以つて、とり擧げられる。そうした仕方によつて、教會は、眞實に、普遍的 Catholic なものになる。デューイの宗教觀は、キリスト教的基盤の中で育くまれた。そしてキリスト教を踏を越えて展開した一般に通用するヒューマニズム的宗教觀を樹立したのである。

(三)

制度的宗教に對する反撥は彼を導いて遂に religious なものゝ主張へと進ませた。勿論、制度的なものへの否定的態度は宗教に關するのみではない一般に固定した組織の底に流れる生命を救い出し、これをその自發的な展開に委ねようとし、又この自然的生命への搖ぎない信賴、蔽はれた力への信賴、知性による計畫と建設の重要性をとくという方針は彼が凡ゆる問題に於いて示すところである。従つて彼の宗教觀は哲學の諸問題に關する見解と十分に調和するものであり、又其處から容易に想像することの出来るものである。彼が宗教として排除するのは、Luther によつて改革せられた限りのキリスト教である。宗教は個人の内部に自己の場所を有する又宗教という文化領域が残つてゐる。彼は宗教に與えられたこの場所を承認しない。即ち宗教が獨立の領域を占有することを認めない。宗教改革は他面から見れば人間生活の分裂である。外的生活と内的生活とが相互に無關係に並存するに至る。デューイは人間をこの分裂から救ひ再び生活に統一を與えようと欲する。併しながら、この統一を實現するには、宗教が獨立の領域を占有することによつてではなく、宗教が自己を否定して「宗教的なもの」になることによつてである。こゝに實現されようとする統一は宗教的なものが凡ゆる人間經驗の一面として働くことによつて可能である。即ち宗教は自己を否定

しつゝ、新しく宗教的なものとして一切の人間經驗に即して生き、これを通じて人間生活の統一を生み出すことが出来るかと考へているが、彼は既に宗教から遠く離れていることは言ふまでもない。彼の思想の根柢には人間は自然の世界に含まれると同時に、社會生活のうちに編み込まれていてこの自然と社會との二つの方向に於いて、人間は限らない關係と連鎖の網に包まれてゐる。自然に對する敬虔と Community に對する獻身とに生きながら、自ら掲げた理想によつて限りなく自己を超越して行く人間像が描き出されている。併し、人間とは肉體と魂との統一體であつて、魂の一部は兩親より分與されたる自己の魂（これは死後に於て靈的存在として不滅のものである。）と他の一部は萬物の存在そのもの又自己の存在そのものが、それに依つて生み出され、且つ活かされ、それに依存している所の宇宙の大氣より分與され、且つ死後、宇宙の根源たるこの大氣に還歸する部分より構成されている。即ち人間とはかゝる二重構造をもつ魂と肉體の統一體であり、しかも同時に魂が主で肉體が従であるという價値の差別が結びついている。

かゝる構造を持つ人間は環境（人的・物的）との關係に於て存在している。換言すれば、人は環境を規定すると共に環境から規定されているのである。即ち、兩者の相互規定に於て人間の現實を考へることが出来る。更に換言すれば對人交渉と對物交渉の相互轉換、互徹互入が我々人間の具體的現實ということが出来る。而してかゝる具體的現實に於て人間はその使命・完遂に努力すべきものである。

かゝる立場から見れば、デューイの人間像は根の無き樹木に等しい。従つて彼の所謂、ヒューマニズムの宗教觀は人間存在の究極との根源との聯繫なき宗教觀といはなければならぬ。宗教は人間がこの究極の根源にふりかへり、絶對性に面接するところに成り立つものであるといはなければならぬ。

以上

参 考 書

- 1' Reconstruction in Philosophy. (1920)
- 31' Human Nature and Conduct. (1922)
- 31' A common Faith. (1934)
- 4' A History of philosophical Ideas in America. (W. H. Werkmeister) —(1949)—